



ひら

まちづくりをテーマに年400回の講演をする

藻^も谷^{たに}浩^{こう}介^{すけ}さん(41)

2006.2.25
朝日 朝刊

呼ばれば、どこへでも行く、が信条だ。年明けから長崎県対馬市、盛岡市、愛媛県宇和島市など国内を東奔西走する。講演数は年約400回。1日で朝昼晩の3力所掛け持ちはざらだ。

肩書は、政府系金融機関・日本政策投資銀行(本店・東京)の地域企画部参事役。7年前から市町村行脚の講演を続け、地域の活性化を助言する。辛口の講演が評判を呼び、今引く手あまただ。

1月中旬、小豆島を訪ね

た。演題は「なぜ小豆島の観光は振るわないのか」。詰めかけた地元観光業者を前に、「努力せずに成長できた時代に慣れた高齢経営者は早期退場すべきだ」。地元の町長は「耳が痛い。刺激になりました」とうなずいた。

書齋は移動中のさまざまな乗り物内だ。多忙を極めても、可能な限り妻と小学生の息子2人が待つ東京には帰るという家族思いでもある。

小学生のころから地図が愛読書だった。個人的な旅行も

含め、三宅島と小笠原を除く、国内全市町村を旅した。地方都市を歩くところも似た光景が広がると感じる。駅前に高層ビルが建つ一方で、商店街にシャッター通りが続く。地域再生のカギは、「固有の街並みの復活」とみる。

昔ながらの木造家屋、れんが造りの建物、土蔵などを街の個性にするべきだ、と説く。

「実際に地域を変えられるのは住民。彼らの背中を押すのが、僕の役目です」

文・写真 西本 秀